

# **2025年度 法学部人文科学・自然科学研究会紹介**

**— 法学部副専攻認定制度 —**

# 目次

|                  |   |
|------------------|---|
| 法学部「副専攻認定制度」について | 2 |
|------------------|---|

| 人文科学研究会      |                          |    |
|--------------|--------------------------|----|
| 担当者          | テーマ                      |    |
| 磯崎 敦仁        | 北朝鮮研究                    | 4  |
| 大久保 教宏       | 世界の宗教と社会                 | 5  |
| 大出 敦         | フランス文学と日本                | 6  |
| 大隼 エヴァ       | アラブの声：メディアを通じて           | 7  |
| 大和田 俊之       | アメリカ文化研究                 | 8  |
| 奥田 暁代        | アメリカの文化と社会               | 9  |
| 笠井 裕之        | 詩を読み、詩を書く                | 10 |
| 片山 杜秀        | 日本の思想と文化                 | 11 |
| 許 光俊         | 小説を読む、書く                 | 12 |
| 熊野谷 葉子       | ロシアの文化と社会                | 13 |
| 佐藤 元状        | 21 世紀の映画研究 (ヨーロッパ・アジア)   | 14 |
| 篠原 俊吾        | ことばの分析                   | 15 |
| 常山 菜穂子       | パフォーミング・アーツ研究            | 16 |
| 永嶋 友         | イギリス文化・社会とメディア           | 17 |
| 檜橋・アンリ, ナタリー | Société française        | 18 |
| 浜田 和範        | 世界の文学を読む                 | 19 |
| 星野 真志        | 近現代イギリスの文化と社会            | 20 |
| 本谷 裕子        | ラテンアメリカの文化と社会            | 21 |
| 安田 淳         | 中国及び東アジアの安全保障            | 22 |
| 横山 千晶        | 植民地から見るイギリス文学            | 23 |
| 林 秀光         | 人文・社会科学と自然科学の架け橋——環境史を学ぶ | 24 |

| 自然科学研究会 |                 |    |
|---------|-----------------|----|
| 担当者     | テーマ             |    |
| 小野 裕剛   | 生命科学にかかわる諸問題    | 25 |
| 小林 宏充   | 身の回りの科学研究 (物理学) | 26 |

## 法学部「副専攻認定制度」について

### 専門以外の関心事を追求し、副専攻として認定してもらおう

法学部の学生であるみなさんは、まずは法律学科目や政治学科目といった専門科目をしっかり学んでください。それが基本。

でも、専門さえ学べばそれでよいのでしょうか。実は皆さんには、以前から関心を持っている分野があるのではないのでしょうか。「ひそかに小説家志望である（できれば文学賞をもらいたい）」「生物を観察していて飽きない」「日本語は言語として面白すぎることに気付いた」「神社仏閣めぐりにはまっている」などなど…

大学には、専門以外の知的好奇心を満たすため、さまざまな授業があります。法学部ではそれらを「人文科学科目」「自然科学科目」などとして、一定単位数を履修することになっています。それらの授業を通して、ぜひ皆さんが興味を持っていることを学問的に掘り下げていってください。

興味のおもむくままに広く浅くランダムに科目を履修していくのは大いに結構。だけど、テーマを決めて計画的に学び、もう一つの専門といえるほど質量ともに充実した知識や研究を積み重ねることができたらもっと素晴らしいのではないか。というわけで始まったのが「副専攻認定制度」です。これは副専攻としての学士号を与えるものではありませんが、興味があるテーマに関連する科目を履修し、条件を満たした学生には「法学部副専攻認定証」が授与されます。数多くの科目の中から関心のある科目を自分で探し出し、知識や研究を自主的に組み立てていくことを奨励する制度です。知とは、あるいは知の喜びや楽しさとは、自由と自発性の上に花咲くのです。

### 副専攻認定の条件：単位取得・卒業研究

副専攻認定のための条件は2つあります。

1. ひとつの領域やテーマについて、それに関連する科目を合計16単位以上取得していること。  
この16単位以上の中には、3・4年次に履修する「人文科学研究会」「自然科学研究会」が含まれます。外国語科目および専門科目（法律学科生の法律学科目、政治学科生の政治学科目）は「関連する科目」とは認められません。
2. 人文科学の場合は3・4年次の2年間、自然科学の場合は3年次か4年次の1年間、それぞれ「人文科学研究会」ないし「自然科学研究会」を履修すること（留学のためにこれらの科目に不足単位が出る場合は、留学先で履修した科目の単位によって補充することが認められる場合もあり）。さらに卒業論文レベルの成果をまとめ、提出すること。なお、研究会の担当者によっては履修条件を設ける場合があります。

研究会は少人数授業ですから、教員や学生同士で刺激を与えたり受けたりしながら、濃密な時間を過ごすことができます。これこそが大学の授業の醍醐味です。

### もうちょっと詳しく！ 人文科学の場合

日吉設置の関連する科目を8単位以上と三田設置の「人文科学研究会Ⅰ～Ⅳ」を8単位、合計16単位以上取得し、卒業研究を提出することが必須条件です。

必須要件1：日吉設置の関連する科目（合計8単位以上）

必須要件2：三田設置の人文科学研究会Ⅰ～Ⅳ（各学期2単位、合計8単位以上）＋卒業研究  
ロースクールを目指す早期卒業者は3年間で修了することもできますが、人文科学研究会の単位数が4単位不足します。日吉で人文科学特論を4単位分取得しておくか、3年次に人文科学研究会Ⅰ・Ⅱをもう1コマ履修して4単位取得し、不足分を補うことができます。あるいは人文科学特論と人文科学研究会の両方で4単位取得でも構いません。詳細は、各人文科学研究会担当者に問い合わせましょう。

副専攻（人文科学）認定の例①：アメリカの文化と社会

**1・2年次** 地域文化論 [アメリカ]Ⅰ～Ⅳ（各学期2単位、合計8単位）、他

**3・4年次** 人文科学研究会（アメリカ文化研究）（各学期2単位、合計8単位）、他＋卒業研究

⇒合計16単位以上

## もうちょっと詳しく！ 自然科学の場合

日吉設置の実験科目（科目名に「実験を含む」と記述があるもの）6単位以上と、三田に設置された「自然科学研究会 III・IV」（IIIとIVは同一の担当者）4単位以上を取得し、卒業研究を提出することが必須条件です。さらに、前述の科目を含めて、関連する科目の取得合計単位数が16単位以上となる必要があります。

必須要件1：日吉設置実験科目＝物理学I・II、化学I・II、生物学I・II  
（各学期3単位から合計6単位以上）

必須要件2：三田設置自然科学研究会 III・IV（同一の担当者）  
（各学期2単位、合計4単位以上）＋卒業研究

自然科学研究会 III・IVは3、4年生対象の科目であり、履修に際しては日吉設置の実験科目を含め、関連する科目8単位以上をすでに取得していることが原則です。また、自然科学研究会の履修は、原則として3年次か4年次の1年間です。ただし、担当者によっては2年間の履修を課していることもあり、その場合は特例として合計8単位が認められます。詳細については、各担当者の個別説明を参照して下さい。

副専攻（自然科学）認定の例：生物学

**1・2年次** 実験科目（必修）：生物学I・II（各学期3単位、合計6単位）

自然科学科目：心理学I・II（各学期2単位、合計4単位）、自然科学総合講座I（学期2単位）、他

**3・4年次** 自然科学研究会 III・IV（生物学）（各学期2単位、合計4単位）、他＋卒業研究  
⇒合計16単位以上

## 人文科学研究会、自然科学研究会履修の際の注意

履修を希望する学生は、Web履修申告システムによる履修申告手続のほか、初回授業に必ず出席をし、担当者の許可を受けてください。履修希望者が多すぎる場合は、選抜を行うこともあります。本ファイルの各研究会のページを必ず確認してください。

## 副専攻認定へのおおまかな流れ

〔入学時〕 本ファイルの内容をよく読み、関心のある人文科学研究会、自然科学研究会を見つける。

〔1・2年次〕 関心のある研究会のページに記載された「関連する科目」として履修をすすめる科目を参考にしながら、日吉で関連する科目を履修する。

〔2年次11月～12月〕 日吉で開かれる副専攻認定制度の全体説明会、各研究会の個別説明会に出席して、研究計画を立てる上での参考にしてください。

〔3・4年次〕 人文科学研究会ないし自然科学研究会を履修。卒業制作を提出。

現時点では副専攻認定を受ける決心がつかない人も、ここに書いてある条件を意識して授業を取っておけば、3年生や4年生になって決めることもできます。

副専攻認定制度と人文科学・自然科学研究会については以下のサイトでより詳しく知ることができます。

副専攻〔人文科学研究会／自然科学研究会〕（法学部HP＞副専攻）

<https://www.law.keio.ac.jp/cross-listed/submajor.html>

法学部における副専攻の理念と研究会の例を紹介。

「副専攻認定制度」（塾生サイト＞日吉キャンパス法学部＞授業）

<https://www.students.keio.ac.jp/hy/law/class/registration/minor.html>

副専攻認定制度についての詳しい説明、最新の「法学部人文科学・自然科学研究会紹介冊子」（PDF）、開講科目一覧など。2025年度三田で開講される副専攻のプログラムはここで確認。

研究会紹介・成果一覧・卒業制作論文（上記いずれのサイトからもアクセス可能）

<https://www.students.keio.ac.jp/hy/law/class/registration/minor-list.html>

公開されている卒業制作論文はここで読める！

研究会一覧（法学部ゼミナール総合サイト）

<https://keiolaw.org/seminar>

各研究会が活動の様子や先生について自ら語るページ。写真多数。

法学部副専攻認定制度  
人文科学研究会  
(3・4年生)

担当者：儀崎 敦仁  
いそざき あつひと

テーマ：北朝鮮研究

**授業内容：**

北朝鮮を題材に、自らの問題意識を鮮明にし、それを解明する力を養う少人数授業。

春学期には、北朝鮮に関する文献を輪読する。両国に対する知見を深めるのみならず、学術論文の読み方と議論の方法を学ぶのが目的である。

秋学期には、輪読を継続するとともに、各自の関心にもとづいた研究発表を行う。4年次に論文を提出することになる。

**事前の準備：**

(1) 次の文献を必ず読んでおくこと。

平岩俊司『北朝鮮：変貌を続ける独裁国家』中公新書、2013年。

菊池嘉晃『北朝鮮帰国事業：「壮大な拉致」か「追放」か』中公新書、2009年。

和田春樹『日朝交渉 30 年史』ちくま新書、2022年。

(2) 北朝鮮に対する自らの関心事項について 2,000 字程度で整理しておくこと。春学期初回授業開始までに提出を要する。

**「関連する科目」として履修をすすめる科目：**

地域文化論(東アジア・朝鮮半島)Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

地域文化論(東アジア・中国)Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ

人文科学特論 など

**その他：**

- ・ 毎回相当な準備を要するため、履修には相応の覚悟が必要である。
- ・ 朝鮮語文献の読解が可能な学生が望ましい。
- ・ 2年間履修して確実に論文を提出できる、積極的な学生のみ受け入れる。

法学部副専攻認定制度  
人文科学研究会  
(3・4年生)

担当者：<sup>お お く ぼ の り ひ ろ</sup>大久保 教 宏

テーマ：世界の宗教と社会

**授業内容：**

世界各地で現在生じている様々な問題や歴史上の出来事に宗教がどのように関わってきたかを探りながら、社会における宗教の重要性について研究します。世界の多くの地において、宗教の影響力は外部からの観察者が想像する以上に大きく、宗教に関する知識を深めておくことは、将来国際的に活躍しようとする諸君にとって、大いに意義のあることでしょう。

授業では、まず宗教に関する研究を行う際に必要な知識や方法を習得するための基本的文献や、様々な宗教問題を扱った研究書を講読します。映像資料の視聴も行います。その作業の中で、自分の研究テーマを絞り、研究発表を行って、2年間で修了論文としてまとめてもらいます。これまでの履修者は、震災と宗教、フェミニズムと宗教、日本人は無宗教か、道徳と宗教、フランスのユダヤ人、日本人ムスリム、国家神道、現代アンデスの宗教、海外の新宗教などを研究テーマとして取り上げてきました。宗教に関わる問題は非常に多岐にわたるため、お互いの発表を聞くことで、おのずと視野が広がります。必ずしも副専攻の認定を目指さなくてもかまいません。

**事前の準備：**

担当者がどのような研究をしているか知りたい場合は、次の3点を読んでみてください。

- 1) 大久保教宏 『プロテスタンティズムとメキシコ革命』 新教出版社、2005年
- 2) 大久保教宏他編 『ラテンアメリカ 出会いのかたち』 慶應義塾大学出版会、2010年
- 3) 大久保教宏他 『世俗化後のグローバル宗教事情』 岩波書店、2018年

**「関連する科目」として履修をすすめる科目：**

副専攻としての認定を受けるためには、1～2年生のときに自分が扱う研究テーマに関連した科目を8単位分履修しておいてください。宗教学の他、各自の関心に関連のある地域文化論、歴史、哲学、倫理学、文学、人文科学特論などを履修しておくといでしょう。

**その他：**

大久保は三田で大学院社会学研究科の授業も担当しています。学部卒業後、社会学研究科に進学して宗教研究やラテンアメリカ研究を行うことに関心があるなら、ぜひ履修してください。

質問は [okubo@keio.jp](mailto:okubo@keio.jp) まで。

**法学部副専攻認定制度**  
**人文科学研究会**  
**(3・4年生)**

**担当者：** おおで あつし 大出 敦

**テーマ：** フランス文学と日本

**授業内容：**

この研究会では、フランス文学と日本をテーマにします。私自身は、ポール・クローデルという 20 世紀を代表する詩人・劇作家を専門としています。彼は 20 世紀に象徴主義のマラルメを引き継いでいきますが、一方で駐日フランス大使として大正末期の日本に滞在した経験を持つ希有な人物です。彼の思想はカトリシズムが基本ですが、外交官として世界各地、とりわけアジアを歴訪したこともあり、仏教、老荘思想、国学思想などの影響も受けていて、独特の思想を形成しています。このクローデルの作品をテキストにして、クローデルが日本の文化や文学にどう影響されたかを考えていきたいと思っています。

研究会では、ポール・クローデルの日本論や作品をテキストにして、読書会形式で批判的読解していくとともに、定期的に論文作成のための発想法、テーマの選定の仕方や絞り方、アウトラインの組み立て方、論文の書き方を実践していき、論文を作成してもらいます。

論文のテーマは、フランスの作家・文化人・芸術家、あるいはフランスから影響を受けた日本の作家・文化人・芸術家の作品をさまざまな観点から分析するものであれば、自由に設定して問題ありません。

**事前の準備：**

「私たちは、主観的観点からしか客観という理想を発展させられない」(マルクス・ガブリエル)ということを中心に考えて下さい。閃きや思いつきは論文の種ですので、大切に育ててあげて、客観的な成果としてアウトプットできるようにして下さい。事前に準備しなければならないものは、特にありませんが、時間のあるときに以下のような参考文献を読んでおいて下さい。

- ・大出 敦・直江健介『プレゼンテーション入門』、慶應義塾大学出版会、2020 年
- ・大出 敦『クリティカル・リーディング入門』、慶應義塾大学出版会、2015 年

**「関連する科目」として履修をすすめる科目：**

日吉に設置されている「地域文化論 (フランス)」「文学」「人文科学特論」などの人文科学に関する科目を履修してあることが望ましいですが、特に制限はありません。疑問があったら以下のメールアドレスに連絡して下さい。

**その他：**

履修に関する質問等は以下のメールアドレスにして下さい。 [atsushiode@keio.jp](mailto:atsushiode@keio.jp)

法学部副専攻認定制度  
人文科学研究会  
(3・4年生)

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                 |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 担当者： <sup>おおばや</sup> 大隼 エヴァ                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
| テーマ：アラブの声:メディアを通じて                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| <p><b>授業内容：</b></p> <p>「アラブ世界」は23の国々から構成されているが、しばしばひとまとめにされてしまう。この授業では、特定の社会を反映するメディア（映画や番組など）を通じて社会の理解を深め、論文講読を組み合わせることで、よりバランスの取れた視点を養うことを目指す。</p> <p>アラブ諸国の社会構造や問題に焦点を当て、その多様で豊かなテーマを深く探求するとともに、学生自身の意見形成も目指す。春学期および秋学期を通じて、さまざまなメディアジャンルを通じてアラブ世界に関する知識を広げ、議論を通じて専門性を高めていく。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| <p><b>事前の準備：</b></p> <p>必然的ではないが、以下の文献の閲覧を勧める。</p> <p>Margaret K. Nydell. 2018. <i>Understanding Arabs, 6th Edition: A Contemporary Guide to Arab Society</i>. Intercultural Press. London.</p> <p>Jillian Schwedler. 2019. <i>Understanding the Contemporary Middle East</i>. edited by Deborah J. Gerner and Jillian Schwedler. Holmes &amp; Meier Publication.</p> <p>Albert Hourani. 2013. <i>A History of the Arab Peoples</i>. Faber &amp; Faber.</p> <p>Noha Mellor, Khalil Rinnawi, Nabil Dajani, and Muhammad I. Ayish. 2019. <i>Arab Media: Globalization and Emerging Media Industries</i>. Polity.</p> <p>黒田彩加. 2019. 『イスラーム中道派の構想力：現代エジプトの社会・政治変動の中で』。ナカニシヤ出版。</p> |
| <p><b>「関連する科目」として履修をすすめる科目：</b></p> <p>以下の科目をすすめるが、本授業の履修条件ではない。</p> <p>人文科学特論（アラブ思考法）Ⅰ、Ⅱ</p> <p>地域文化論（アラブ世界）Ⅰ、Ⅱ</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| <p><b>その他：</b></p> <p>推奨する科目を履修できない場合でも構いませんが、授業への積極的な参加と議論に積極的に貢献することが要求されます。無断欠席が3回以上になると成績に影響しますので、ご注意ください。所属する学部や学年は問いません。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |

法学部副専攻認定制度  
人文科学研究会  
(3・4年生)

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 担当者： <small>おおわだ としゆき</small> 大和田 俊之                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| テーマ：アメリカ文化研究                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| <p><b>授業内容：</b></p> <p>本研究会ではアメリカの音楽文化を中心に持ち上げ、少人数の演習形式で論文などを購読する。R&amp;B、ヒップホップ、ジャズ、ブロードウェイ・ミュージカル、カントリー、ロック、ブルースなどアメリカの音楽を歴史や社会との関わりにおいて考察し、音楽文化の様々な分析手法を学ぶ。音楽ファンだけでなく、文化研究や批評理論などに関心がある学生を歓迎する。(特定のジャンルが好きな学生は、別のジャンルにも知的な関心を持ってほしい。) 個々の研究テーマとしては、音楽とジェンダー／人種／階級、ファン・コミュニティの様相、テクノロジー／メディアの発展と音楽文化などがありうるだろう。また、日本のポピュラー音楽文化との関係も視野におきながら議論を進めたい。三年生は主として三田祭で配布する同人誌の編集作業に取り組み、四年生は卒業論文の執筆を目的とする。</p> |
| <p><b>事前の準備：</b></p> <p>副専攻認定を希望しない学生の履修も認めるが、アメリカ史に関する基本的な知識を習得しておくこと。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| <p><b>「関連する科目」として履修をすすめる科目：</b></p> <p>副専攻認定のためには日吉設置の「地域文化論(アメリカ)ⅠからⅣ」、「人文科学特論」のうち8単位を履修した上で、当研究会を二年継続して履修・単位取得することが必要。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| <p><b>その他：</b></p> <p>研究会に関する質問などは、tohwada@gmail.com まで。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |

法学部副専攻認定制度  
人文科学研究会  
(3・4年生)

担当者： おくだ あきよ  
奥田 暁代

テーマ： アメリカの文化と社会

**授業内容：**

アメリカ研究(American Studies)の研究会です。おもに人種／エスニシティに関わる問題を取りあげています。履修者各自が決めたテーマで研究発表を行い、論文を執筆します(論文集を作成)。授業では、文献を読みながら、おもに発表／ディスカッションを通じてアメリカについての知識を養います。

2024 年度は、ベストセラーとなった『孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生』(*Bowling Alone: the Collapse and Revival of American Community*, 2000 年)や『われらの子ども——米国における機会格差の拡大』(*Our Kids: The American Dream in Crisis*, 2015 年)などで知られる政治学者ロバート・D・パットナム(Robert D. Putnam)の最新作『上昇(アップスウィング)——アメリカは再び〈団結〉できるのか』(*The Upswing: How America Came Together a Century Ago and How We Can Do It Again*, 2020 年)を取りあげました。コミュニティの衰退に着目してきたパットナムが、『上昇』では現在の深刻化する経済格差や社会分断を、一世紀にわたる歴史に照らして説明しています。『上昇』を精読しながら、アメリカの歴史を振り返りつつ、現在のアメリカ社会の抱える課題、その解決策について考察しました。

2025 年度は、2024 年の大統領選挙で顕在化したアメリカ社会の問題——分断、民主主義の危機、大衆操作など——について考えます。南部ルイジアナ州のティーパーティー運動支持者を分析した A・R・ホックシールドの『壁の向こうの住人たち——アメリカの右派を覆う怒りと嘆き——』(*Strangers in Their Own Land*, 2016 年)を精読しながら、トランプ大統領を支持する(南部)白人層について文化的側面から考えます。

**事前の準備：**

日吉設置の「地域文化論(アメリカ)」を履修しておく、あるいはアメリカの文化や社会に関する本を読んでおくことが望ましいですが、必須ではありません。

**「関連する科目」として履修をすすめる科目：**

「地域文化論(アメリカ)」、「人文科学特論」(アメリカ文化関連)

**その他：**

法学部副専攻認定のためには、日吉設置の「地域文化論 I～IV」、「人文科学特論」のうち 8 単位を履修した上で、研究会を 2 年継続して履修してください。

問い合わせ先：[aokuda@keio.jp](mailto:aokuda@keio.jp)

**法学部副専攻認定制度**  
**人文科学研究会**  
**(3・4年生)**

担当者：<sup>かさい</sup>笠井 <sup>ひろゆき</sup>裕之

**テーマ：詩を読み、詩を書く**

**授業内容：**

詩は「ことば」を扱う芸術のうち、もっとも先端的な領域です。文学のほかの領域とも、また哲学・思想、科学、音楽、美術とも相互的に作用する可能性があり、そしてなにより「ことば」そのものと直に対峙する機会であるからです。

この研究会では、おそらく普段あまり読まれていないであろう「現代詩」を読み、とりわけ書くことを通して「ことば」のもつ根源的な力とその働きについて体験的に学びます。

参加者には各学期に数回、作品の提出を求め、全員で合評をおこないます。書かれたばかりの作品の最初の読者となること——同世代の仲間との相互批評はみなさんに大きな刺激を与えてくれることでしょう。

年度末に成果物として合同の詩集、また各自の個人詩集を制作します。この研究会は他大学の詩の講座と連携する「インカレポエトリ」のプロジェクトに加わっているため、大学の枠を越えて作品を発表する可能性も開かれています。

**事前の準備：**

笠井担当の「人文科学特論」（日吉・法学部）あるいは条川麻里生氏担当の「文章と表現」（三田・文学部）で実作の経験を重ねていることが履修の前提となりますが、「詩を読み、詩を書く」ことが生きるために必要と思う人なら、どなたでも参加できます。まずは授業のWebサイト [hirokas.com](http://hirokas.com) を閲覧してみてください。サイトにはパスワードがかかっているため希望者は笠井にメールで連絡してください。研究会の履修に関する質問も遠慮なくどうぞ。メールアドレス：[kasai@keio.jp](mailto:kasai@keio.jp)

**「関連する科目」として履修をすすめる科目：**

上記の笠井担当「人文科学特論」、条川氏担当「文章と表現」。その他、「文学」をはじめジャンルを問わず文学系・芸術系の科目。

**その他：**

法学部副専攻認定のためには、文学と芸術に関わる内容を含む日吉設置の授業から8単位以上を履修した上で、この研究会を2年継続して履修してください。

副専攻の認定を目指さない学生、また他学部生も歓迎します。

法学部副専攻認定制度  
人文科学研究会  
(3・4年生)

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>担当者：片山<sup>かたやま</sup> 杜<sup>もりひで</sup> 秀</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| <p>テーマ：日本の思想と文化</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| <p><b>授業内容：</b>「日本の思想と文化」について学ぶ研究会です。みんなで学び、個々人でも学んでもらいます。みんなで学ぶというのは、履修者全員で文献を読むということです。「日本の思想と文化」を知るための基礎的文献を、その年の履修者の志向に配慮しながら、なるべく幅広く読んで、報告して貰い、疑問を出し合い、討論します。視聴覚資料の鑑賞も行います。共通文献としては、西田幾多郎、田辺元、三島由紀夫、岡倉天心、鈴木大拙、折口信夫、丸山眞男などを取り上げてきました。個々人で学ぶというのは、個人でテーマを持って個人研究してもらおうということです。研究の対象は幅広く許容します。これまでのメンバーの個別研究テーマは、三島由紀夫、大江健三郎、安部公房、沼正三、野田秀樹、土方巽、岡崎京子、岡本喜八、市川猿之助、尾崎豊、二・二六事件、戦争画、日蓮、歌舞伎の女形、YMO、禅、京都、ゴジラ、新宿、日本の野球などです。授業の形態は、輪読、視聴覚資料鑑賞、個別テーマの発表、見学、その他を組み合わせる予定です。普通のゼミのやり方だと思います。合宿も例年ですとどこかの季節に一回行っています。副専攻として履修する場合は、遅くとも3年生の秋学期のうちには個別の研究テーマを確定してもらい、4年生のときに論文かそれに相当する何らかを提出してもらいます。</p> |
| <p><b>事前の準備：</b>履修を希望する方は初回の授業に必ず出席してください。その際、「履修希望の理由、自分の興味関心、何を研究してみたいか」を1000字程度にまとめて、初回授業前日まで <a href="mailto:moto-katayama@keio.jp">moto-katayama@keio.jp</a> まで送ってください。質問等あれば同じメールアドレスにください。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
| <p><b>「関連する科目」として履修をすすめる科目：</b> 特にありません。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| <p><b>その他：</b>履修希望者数がゼミ形式というには多いとか、その他何らかの理由があれば、初回の授業で選考します。上記の作文が選考の主要な材料となるでしょう。副専攻の認定に必要な単位として何が認められるか認められないかについては個別に相談しましょう。副専攻の認定を求めない方の履修も可能です。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |

法学部副専攻認定制度  
人文科学研究会  
(3・4年生)

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 担当者：許 <sup>きよ</sup> <sup>みつとし</sup> 光 俊                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
| テーマ：小説を読む、書く                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| <p><b>授業内容：</b>毎回さまざまな小説を読み、みな（少人数）で論じます。この数年で取り上げたのは、三島由紀夫、ポー、芥川龍之介、菊池寛、カフカ、カミュ、大江健三郎、三木卓、川端康成、深沢七郎、西村賢太などなど。たとえば、三島が匿名で同性愛雑誌に発表した『愛の処刑』では、生徒が先生に切腹を強要したあげく、愛を告白します。また、大江や深沢の場合は右翼を怒らせてお蔵入りした作品など。川端の不気味でエロティックな作品。ただし、今年前半はちょっとニーチェをやってみるかという気になっています。</p> <p>学期末の課題は、短編小説を書くこと。毎回テーマが決まっています。これまでのところ、名作の続編、天皇小説、ホラー小説、不倫小説などなどです。みなさん、なかなかレベルの高いものを書いていて感心させられます。やればできます。</p> |
| <b>事前の準備：</b> 毎回課題を読んできてください。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
| <b>「関連する科目」として履修をすすめる科目：</b> 文学に関する授業。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| <p><b>その他：</b>副専攻認定を積極的に受けてください。作品論、作家論を書いてもよし、2年間で書いた短編小説4つを磨いて、短編集にしてもよし。相談してください。</p> <p>受講したい人は、あらかじめ知らせてください。warumono@keio.jp<br/>あまり受講希望者が多いときは選抜するかもしれません。</p>                                                                                                                                                                                                             |

法学部副専攻認定制度  
人文科学研究会  
(3・4年生)

担当者：<sup>くまのや</sup>熊野谷 <sup>ようこ</sup>葉子

テーマ：ロシアの文化と社会

**授業内容：**

この研究会では、ロシアおよび旧ソ連や東欧諸国などロシアと関係の深い地域の文化と社会に関して、互いに報告し、議論を通じて理解を深めます。

基本的に、参加者は自分のテーマを決めて半年または1年かけて研究し、論文を作成するとともに、互いのテーマに関心を持って共に学びます。各人が毎回進捗を報告し、参加者が質問をしたり新しい情報をもたらしたりして着実に進めます。論文の書き方も学びましょう。

2023～2024年度の学生のテーマをあげると「非市民問題から見るラトビアにおける言語状況の展望」「カザフ民族アイデンティティとソ連のコレニザーツィア」「ロシアのコンテンポラリーダンス集団“Kanon dance house”について」「アンナ・アニシモヴァの絵本『ボルシチ船長』の翻訳と解説」など実に多様です。それぞれのテーマについて、どのようなアプローチが可能か、どのような先行研究があるのか、一緒に考えながら論文作成を目指します。完成した論文のいくつかは研究会のHPで公開されています。(検索：慶應義塾大学法学部のロシア語＞人文科学研究会ロシア)

副専攻の認定を目指す人は、2年間履修して研究を続け、卒業論文に匹敵する論文を作成します。ぜひ講師に相談してください。

**事前の準備：**

皆で勉強したいテーマ、自分が論文にしたいテーマについて、初回の授業で話せるよう考えておくこと。副専攻の認定を目指す人は、これまでに単位を取得した科目を確認し、卒業論文に相当する論文を提出できるよう、論文のテーマを考えておきましょう。

**「関連する科目」として履修をすすめる科目：**

地域文化論ロシア I, II, III, IV

**その他：**

ロシア語の知識はなくても構いません。ただいろいろな外国語ができればそれだけアクセスできる資料や文献が広がります。せっかくの研究会ですから、各人が持っている能力や知識を互いに利用し、外国語だけでなく音楽でも美術でも歴史でも政治でも法律でも、情報を共有し共に考えましょう。

法学部副専攻認定制度  
人文科学研究会  
(3・4年生)

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 担当者：佐藤 元状<br><small>さとう もとのり</small>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| テーマ：21 世紀の映画研究(ヨーロッパ・アジア)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| <p><b>授業内容：</b></p> <p>本研究会では、ヨーロッパとアジアの映画を毎回視聴し、その後1時間近く視聴した作品について全員でディスカッションをしていきます。2025 年度は、ヨーロッパに目を向け、イタリア、フランス、スペイン、ポルトガル、ハンガリー、ポーランドの現代映画を扱う予定です。ヨーロッパとアジアの視聴覚的な感性の差異と同一性について、現代の映像メディアの政治的・美学的な可能性について徹底的に議論を重ねていきます。1年後には、国際的な感性を備えた映画批評家が研究会から生まれてくるでしょう。映画監督の道を進みたい学生さんや、映画研究者を目指す学生さんにおすすめの授業です。これまで、このゼミは映画監督、映画批評家、映画研究者を輩出しています。</p>                                                                                                                                           |
| <p><b>事前の準備：</b></p> <p>事前の準備は入りませんが、なにかを新しく学びたいという気持ちを大切にしてください。知的にエキサイティングな授業ですが、忍耐力と柔軟性が必要です。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| <p><b>「関連する科目」として履修をすすめる科目：</b></p> <p>人文科学特論、地域文化論、文学など、日吉で人文科学系の授業をきちんと履修しておいてください。副専攻としては、「イギリスの社会と文化」、または「芸術」での副専攻が望ましいと思います。ただし、個別に相談にのります。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| <p><b>その他：</b></p> <p>質問があれば、メールをください！ motsato@keio.jp 毎年「論文集」を刊行しています。<br/>なお今年は、地域文化論（イギリス）担当教員一同で個別説明会を行います。<br/>12/18（水）12:30-12:55@J21 教室で開催したいと思います。来れない方は Zoom 配信を！<br/>Topic: イギリス部門 副専攻説明会<br/>Time: Dec 18, 2024 12:30 PM Osaka, Sapporo, Tokyo<br/><a href="https://keio-univ.zoom.us/j/82094074832?pwd=bLk1XyuXDt1XzKp2IqT0mamaRqdT5z.1">https://keio-univ.zoom.us/j/82094074832?pwd=bLk1XyuXDt1XzKp2IqT0mamaRqdT5z.1</a><br/>Meeting ID: 820 9407 4832<br/>Passcode: 819555</p> |

**法学部副専攻認定制度**  
**人文科学研究会**  
**(3・4年生)**

担当者：篠原 俊 吾<sup>しのはら しゅん ご</sup>

テーマ：ことばの分析

**授業内容：**

本研究会では、実際のデータを集め、ことばを分析することに取り組んでももらいます。対象の言語は、日本語でも英語でも、その他の自分の興味のあるどんな言語でもかまいません。その中でも、日本語のネイティブ・スピーカーとして、普段使用している日本語の言い回しを分析し、いかに複雑極まりない使い分けを難なく使いこなしているかということに気づいてもらうのがよいと思います。データの収集は、アンケート調査、各種コーパスの利用など、生のデータを集めるところから始めます。

最初は五里霧中の状態でも、全く気づかなかった規則性が突然見つかるという「発見の喜び」を体験してもらいたいと思います。副専攻科目として履修を希望する学生も、通常の授業として履修する学生も、他学部の学生も等しく歓迎します。授業は、気になることばについて、調べ、発表し、フィードバックをもらうという流れになります。そして、可能であれば、それを論文という形でまとめることを目指してください。研究は、個人研究でも、共同研究でもかまいません。先輩が始めた研究を後輩が継続するという形態も歓迎です。

受講希望者は、初回の授業に参加するか、もしくはその前に下の担当者メール・アドレスに受講を希望する旨を連絡して下さい。参考までに、過去の学生による研究テーマをいくつか挙げます。

- ・「自撮り界限」、「片目界限」-世にも不思議な界限の世界
- ・「未来を、試着しよう。」-商品広告における言語学的逸脱性の魅力
- ・「コーヒーニューニュー」、「透明なハートで生きたい」-購買意識をそその言葉の仕組みとは？」
- ・「でめたしでめたし」、「かあちゃん、ふともも！」-クレヨンしんちゃんのギャグの深淵を探る
- ・「じゃけん」と言えない広島県民！エセ方言を使ってしまう心理とは？」
- ・「十年後」、「ワンチャン」残り、「ぴえん」は消える？若者言葉の流行・定着・消滅の研究
- ・「櫻井&相葉、結婚」？新聞記事における曖昧性回避法とは？」

**事前の準備：**

副専攻として本研究会を受講する学生は、日吉で言語学Ⅰ～Ⅳや人文科学特論などの言語学関連の授業を履修していることが求められます。

何より、気になる言い回しを普段から探しておきましょう。「カモシカのような脚」は果たしておかしいのか、まだ終了していないのに「アプリを終了しています」というのはどういうことか、「いつ選挙が行われるのかどうかわからない」はどこがおかしいのか、「エリザベス女王」はなぜ「じょおう」ではなく、「じょうおう」と発音されるのかなどなど、日常の日本語に注意を向けておいてください。以下の本は、そんな気になる言い回しを解説した本です。

北原保雄 編著 (2004-2011), 『問題な日本語』, 『続弾！問題な日本語』, 『問題な日本語 その3』, 『問題な日本語 その4』大修館書店

**「関連する科目」として履修をすすめる科目：**

法学部設置の言語学Ⅰ～Ⅳ、人文科学特論（言語学をテーマとするもの）

**その他：**

履修に関する質問は、メール（shungo.a6@keio.jp）で随時受け付けます。お気軽にどうぞ

法学部副専攻認定制度  
人文科学研究会  
(3・4年生)

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 担当者：常山 <small>つねやま</small> 菜穂子 <small>な ほ こ</small>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| テーマ：パフォーミング・アーツ研究                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| <p><b>授業内容：</b></p> <p>本研究会は2007年に発足したのち教員の留学等による2度の休会を挟みながら、2024年度に再開しました。2025年度は第13期生を募集します。</p> <p>パフォーミング・アーツを研究対象とします。戯曲に限らずダンスやミュージカル、映画、ディズニーなども射程に、これらの表象芸術が、いかに同時代の政治経済、国家国民、思想宗教の影響を意識的／無意識的に受けながら形成されているかを検討し、作品に反映された人と社会を浮き彫りにします。その際には多様なアプローチ方法があります。たとえば人種、ジェンダー・セクシュアリティ、階級、地域性、外国との比較や日本での受容の視点から考えたり、さらには、スポーツやテーマパーク、裁判などを広義のパフォーマンスとしてとらえ研究対象にすることもできるでしょう。わたし自身は初期アメリカ演劇を専門としていますが、ゼミ生が行う個々の研究を通して、さまざまなパフォーマンス・シーンについて一緒に学びたいと思っています。</p> <p>当研究会では、「アメリカの文化と社会」の分野で副専攻を認定します。また演劇学や創作、さらにほかの国のパフォーマンス（ウィーンやフレンチ・ミュージカル、四季や東宝・宝塚、ハリウッド以外の映画など）に関する研究のようなアメリカに限定しないテーマに関しては、「芸術の批評と創作」の分野で副専攻を認定します。</p> <p>各回の授業では、基本的な研究方法や背景を学ぶために講義と文献講読を行うと共に、履修者が各自のテーマを設定し、研究成果の口頭発表と論文の執筆をします。</p> |
| <p><b>事前の準備：</b></p> <p>授業で扱う文献などは履修者の希望を広く取り入れたいので、履修希望者は初回授業までに、自身の関心事や本研究会において何を勉強したいか考えておいて下さい。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
| <p><b>「関連する科目」として履修をすすめる科目：</b></p> <p>自身の関心事・テーマに沿った内容の「地域文化論Ⅰ～Ⅳ」「人文科学特論」「文学」「歴史」「音楽」などの科目</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| <p><b>その他：</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・副専攻の認定を受けない学生、1年間のみの履修、他学部生、留学前後も歓迎します。</li><li>・質問・相談は常山 <a href="mailto:tsune@keio.jp">tsune@keio.jp</a> まで！</li></ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |

**法学部副専攻認定制度**  
**人文科学研究会**  
**(3・4年生)**

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>担当者：永嶋 <small>ながしま ゆう</small> 友</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
| <p><b>テーマ：イギリス文化・社会とメディア</b></p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
| <p><b>授業内容：</b></p> <p>この研究会では、イギリス文化・社会とメディアについて広く学んでいます。イギリス以外の国々について扱うこともあります。また、メディアを広い意味で捉え、媒介性を有するものすべて、メディアに関連する事柄すべてを研究対象として認めています。つまり、ネット、テレビ、ラジオ、映画、新聞、雑誌、AI・ロボット・人間・動物、アニメ・漫画、文学・文化、舞台芸術、ファッション、放送、プロパガンダ、言語、出版・広告、教育、ジャーナリズム、音楽、VR・AR などさまざまです。多分野を横断する研究をぜひ目指してください。活気あふれる研究会を一緒に作っていきましょう。</p> <p>研究会の授業・活動内容は、参加者と相談しながら柔軟に決めています。基本は、日本語・英語文献の輪読です。また、それとは別に、各々好きなテーマで個別の研究・制作を進めてもらい、できれば3年生の後期までに、遅くとも4年生の前期までに卒業論文・制作のテーマを確定し、4年生の1月に最終成果を提出していただく予定です。各々の論文・制作のプレゼンテーションやワークショップにも随時取り組んでもらいます。卒業論文・制作の完成後は、ゼミウェブサイトでの公開を予定しています。お茶会、映画・演劇鑑賞、夏季・春季休暇中の活動等も随時検討しています。副専攻認定を目指さない学生、他学部生、半期・一年のみの履修生も歓迎です。今のところ、入ゼミ選考なしで履修いただけます。最新・詳細情報はゼミウェブサイトでご確認ください。過去のイギリス部門の説明会の動画、過去に扱った文献例、ゼミ活動記録などもこちらにあります：<a href="https://nagashimaseminar.wixsite.com/home/about">https://nagashimaseminar.wixsite.com/home/about</a></p> |
| <p><b>事前の準備：</b></p> <p>特にありません。飽くなき探究心・情熱を持って研究会に臨んでください。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| <p><b>「関連する科目」として履修をすすめる科目：</b></p> <p>地域文化論、人文科学特論、文学などをおすすめします。「イギリスの文化と社会」や「芸術の批評と創作」での副専攻が望ましいです。質問・相談等はメールやウェブサイトからお気軽にどうぞ。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
| <p><b>その他：</b></p> <p>メールアドレス：yu.nagashima★keio.jp (★を@に変換)。</p> <p>2024年12月18日(水) 12:30~12:55 に日吉 J21 教室でイギリス部門の研究会の説明会を開催します(横山千晶先生と星野真志先生と合同)。リアルタイムで Zoom 中継もします：</p> <p><a href="https://keio-univ.zoom.us/j/82094074832?pwd=bLklXyXDT1XzKp2lqTOMamaRqdT5z.1">https://keio-univ.zoom.us/j/82094074832?pwd=bLklXyXDT1XzKp2lqTOMamaRqdT5z.1</a></p> <p>(Meeting ID: 820 9407 4832 Passcode: 819555)。ぜひご参加下さい！</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |

法学部副専攻認定制度  
人文科学研究会  
(3・4年生)

|                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 担当者： <sup>ならはし</sup> 檜橋・アンリ，ナタリー                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
| テーマ：Société française                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| <p><b>授業内容：</b></p> <p>Dans ce séminaire, nous étudions divers aspects de la société française, d'une part par l'étude d'un thème commun à partir de documents, d'autre part à travers les thèmes de recherche de chacun, choisis selon les intérêts ( exemples de thèmes étudiés : la laïcité, l'évolution des valeurs, les politiques à l'égard des pays anciennement colonisés, le mariage pour tous, immigration et logement ). Les thèmes de recherche individuelle sont discutés en groupe afin d'en dégager la problématique et définir un plan de recherche. Les avancées de la recherche sont ensuite régulièrement exposées et discutées, le travail doit finalement mener à la rédaction d'un rapport.</p> <p>Les buts du séminaire sont l'acquisition de connaissances sur la société française, par les discussions la pratique de l'échange d'idées, et, les sessions se déroulant en français, de permettre un approfondissement des compétences en langue française.</p> |
| <p><b>事前の準備：</b></p> <p>La langue du séminaire est le français, il est donc nécessaire d'avoir un niveau satisfaisant de compréhension et expression orales. De même, un bon niveau de compréhension écrite est demandé pour avoir accès aux documents en français.</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| <p><b>「関連する科目」として履修をすすめる科目：</b></p> <p>Tous les cours ayant la société française ou un de ses aspects pour sujet, ou en traitant, sont considérés en rapport avec le séminaire.</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| <p><b>その他：</b></p> <p>質問、相談は <a href="mailto:nhenry@keio.jp">nhenry@keio.jp</a> までどうぞ。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |

法学部副専攻認定制度  
人文科学研究会  
(3・4年生)

担当者：浜田 <sup>はまだ かずのり</sup> 和範

テーマ：世界の文学を読む

**授業内容：**

いわゆる「欧米」として慣例的に認識される地域には、アジア、オセアニア、アフリカ、さらにはラテンアメリカ、果ては東欧と呼ばれる地域が隣接しています。この研究会は、そんな場所で書かれてきた文学作品を吟味し、彼ら／彼女らの声が私たちに届けるものを受け取り、それを論文という形でまた新たな読者に受け渡していく試みです。

春学期では、「独裁を読む」というテーマの下、ベラルーシの作家サーシャ・フィリペンコの小説『理不尽ゲーム』(2013)、そしてコロンビアのノーベル賞作家ガブリエル・ガルシア・マルケスの小説『族長の秋』(1975)という、独裁を扱いつつもだいぶ毛色の異なる2冊を講読します。内容や形式について報告・討議を重ねつつ、同時に関連文献を参照しつつ作品の論じ方を身につけます。並行して、自分が言葉を尽くしてみたいと思える対象を定め、秋学期ではその対象作品や関連文献を読みながら論文を書き進め、討議を経て磨き上げていきます。

**事前の準備：**

あなたが立とうとする地平はあまりに広く、ともすれば途方に暮れてしまいます。とはいえやはりその景色の中で、論文の形で言葉にしてみたい対象(テーマ、作家、地域、個々の作品など)を可能な限り定めつつ、初回授業に臨んでもらいたいと思います。

**「関連する科目」として履修をすすめる科目：**

副専攻認定を目指す人は、日吉で開講される「文学」「地域文化論」「歴史」「芸術」「人文科学特論」など自分の興味ある地域・分野に関連する科目を履修しておいてください。

**その他：**

担当教員はラテンアメリカ文学を専門としていますが、世界の文学に関しては知らないことだらけです。皆さんが培ってきた個々の知識を、積極的に供してほしいと思います。授業では、基本的に日本語訳のある作品・関連文献を取り扱います。1年間のみの履修、他学部生の履修も歓迎します。

個別に質問のある場合は、kazhamada[at]keio.jp ([at]を@に替える)までご連絡ください。

法学部副専攻認定制度  
人文科学研究会  
(3・4年生)

担当者：星野 ほしの 真志 まさし

テーマ：近現代イギリスの文化と社会

**授業内容**：20世紀から現在までのイギリスの文化と社会について学びます。2024年度から開講された若い研究会です。イギリス文化についての受講生の興味・関心に応じて教員が資料を選び、受講生とともに検討します。授業内容は映画を観ることと小説を読むことがメインになると思いますが、ノンフィクションの本や音楽なども扱います。授業では、資料についての報告担当を立てつつ、受講生が全員議論に参加します。副専攻認定を目指す4年生には、自身の研究テーマを定めた上で、調査の成果を適宜発表してもらいます。大学の外でイギリス関連の映画の上映や美術展などが開催される場合は、遠足をするかもしれません。

教員はイギリスの文学と映画について研究しています。音楽や美術にも関心があるので、それらが好きな学生も歓迎です。研究テーマは、階級問題、人種問題、食文化なども可能です。イギリス本国ではなくイギリスの植民地（カリブ海、インド、アフリカなど）についての研究もアリです。

教室で映画を観る回は、前編鑑賞した上で議論を行うので、5限終了後も延長する可能性が高いです。授業後の予定は空けておいてください。

2024年度は各学期のはじめと終わりに、三田キャンパス周辺の飲食店で懇親会を開催しました。24年度の受講人数は前期4、後期6です。少人数で和やかな雰囲気です。

**事前の準備**：イギリス文化のどのような側面に興味があるのかを考えておいてください。受講を検討する方は気軽にメールをください。

**「関連する科目」として履修をすすめる科目**：「地域文化論」、「文学」、「人文科学特論」など、イギリスに関する科目はもちろんのこと、地域は問わず文化・文学についての科目はどれも関連科目として考えられます。美術や哲学などの科目も関連すると言えるでしょう。副専攻認定のためには、これらの科目から8単位以上を履修する必要があります。副専攻認定を目指さない学生や他学部の学生の参加も歓迎します。

**その他**：具体的な質問は masashi.hoshino@keio.jp までメールで問い合わせてください。2024年12月18日（水）12:30～12:55に日吉J21教室でイギリス文化専攻の個別説明会を開催します（横山千晶先生・永嶋友先生と合同）。リアルタイムでZoom中継もします。

<https://keio-univ.zoom.us/j/82094074832?pwd=bLk1XyuXDt1XzKp2IqT0mamaRqdT5z.1>

Meeting ID: 820 9407 4832、Passcode: 819555)。ぜひご参加下さい。

法学部副専攻認定制度  
人文科学研究会  
(3・4年生)

担当者：本谷 裕子

テーマ：ラテンアメリカの文化と社会

**授業内容：**

『日本の抱える諸問題を、ラテンアメリカ的発想(スペイン語圏だけでなくポルトガル語圏のブラジル・フランス語圏のカリブ海の国々も含む)の事例から解決してみよう!』これが私たち本谷研究会の掲げるテーマです。みなさんはまず、ご自身の関心に沿った研究テーマを考えてください。南北アメリカ大陸、スペイン、そしてアフリカ大陸をも網羅する大スペイン語圏、そこに加わるポルトガル圏、研究地域の広さはピカイチです。みなさんの、ユニークかつオリジナリティあふれる柔軟な発想に更なる磨きをかけてみましょう。

2024年は「資源の宝庫・現代メキシコを知ろう・学ぼう」というテーマのもと、ビジネスや経済の視点からメキシコの事例を学び、日本は今後メキシコとどのような形で連携していくことができるのかを考えています。また、当研究会ではフィールドワークと称して、都内・都下のラテンアメリカコミュニティやレストランを散策する課外活動も積極的におこないます。2024年には、三田キャンパスで第三回 OGOB 会をおこないました。先輩・後輩の絆の深さも当研究会の魅力のひとつです! 今後も毎年 12 月に開催する予定です。

**事前の準備：**

副専攻としての認定を受ける場合には、なるべく 1～2 年生のときに、自分が扱うテーマに関連科目(外国語科目は除く)を 8 単位分履修しておいてください。地域文化論I、II(イベリア半島)、地域文化論I～IV(ラテンアメリカ)のいずれかの単位が少なくとも 2 単位含まれることが望ましいです。先輩方には、1・2 年次にスペイン語を選択していなかった、スペイン語圏に関して学ぶ地域文化論の授業を履修していなかった人もいました。その点に関しては随時対応していきます。第一回授業の際、ご自身の関心を 1200 字程度にまとめたものを提出してください。

**「関連する科目」として履修をすすめる科目：**

地域文化論I、II(イベリア半島)、地域文化論I～IV(ラテンアメリカ)のいずれかの単位が少なくとも 2 単位含まれることが望ましいのですが、日吉で取得した科目を研究会での研究テーマと結びつけて考えることも可能です。

**その他：**

質問のある人はいつでもこちらへどうぞ → [yhonya@keio.jp](mailto:yhonya@keio.jp)

みなさんとお目にかかれることを楽しみにしています。Te espero con los brazos abiertos.

法学部副専攻認定制度  
人文科学研究会  
(3・4年生)

担当者：やすだ じゅん  
安田 淳

テーマ：中国及び東アジアの安全保障

**授業内容：**安全保障は、人文科学を含む多領域にわたる複雑かつ興味深い問題です。この研究会は、少人数のゼミ形式で、主として中国や東アジアの安全保障を学び、この地域の安全保障環境についての問題意識を高め理解を深めることを目的とします。また諸君が自由で大胆に発想し論証する力を養います。取り上げる題材にはこの地域の軍事はもちろんのこと、領土、エネルギー、環境、交通、歴史、宗教、文化、教育、外交関係等があり、広く履修者諸君の要望を汲み上げます。

春学期には、基本的な知識を習得・整理するための講義や文献講読を行います。秋学期には、共同研究発表や卒業論文作成に向けた中間報告発表・討論を行います。その他に、夏合宿(9月)と冬合宿(12月)、安全保障関係者によるブリーフィングや関連施設の見学・研修等も実施する予定です。

**事前の準備：**まず、中国や東アジアに対する興味・関心や問題意識を持つことが大前提です。

また、この研究会活動をより効果的、効率的に進めるため、履修希望者には、初回ゼミ授業時に指示した一定期間内(約1か月)に、レポートやサブノートの提出を課すことがあります。

**「関連する科目」として履修をすすめる科目：**地域文化論(中国・東アジア)、人文科学特論(中国・東アジア)をはじめとして、日吉、三田を問わず中国や東アジアに関連する科目、国際政治や安全保障に関連する科目の履修を広く推奨します。

副専攻認定のために必要な「関連する科目」としては、この研究会で学び作成した卒業制作(論文等)と、自分が研究会以外に(とくに日吉で)履修した科目とがどのように関連するかを自ら考え説明できれば、広く認定します。

**その他：**新3、4年生いずれも履修することができます。授業は3、4年生合同の週1回です。

履修者には卒業制作を課し、卒業時に副専攻認定証が授与されることを目指してもらいます。履修希望者は、そのつもりで前向きかつ積極的に研究会活動に臨んでください。

なお、担当者は今年度末で定年退職予定のため、今年度の履修者がこの研究会最後の代ということになります。新3年生がこの研究会を今年度のみ履修することは歓迎しますが、中国・東アジアに関する副専攻認定を目指す場合には、来年度に続けてこの分野の他の担当者による人文科学研究会を履修する必要があります。

不明の点等はEメール(jyasuda@keio.jp)でいつでも遠慮なく質問・相談してください。

**法学部副専攻認定制度**  
**人文科学研究会**  
**(3・4年生)**

**担当者：**横山<sup>よこやま</sup> 千晶<sup>ちあき</sup>

**テーマ：**植民地から見るイギリス文学

授業内容：アメリカの大統領選挙を経て、国際社会の未来は、ますます想像することが難しくなりました。ロシアのウクライナ侵攻や、アフリカ諸国の貧困と政治的混乱、イスラエルとハマス、ヒズボラの戦いは、国境を越えて影響を与え、いたるところで対立が生まれています。この現状の中で分断の根は何なのかが議論され、今まで等閑視されてきた歴史的事実や、民族、人種、移民、ジェンダーなどのさまざまな観点の中で、今まで声をあげることができなかった人々に関心が向けられるようになりました。もちろん、日本に拠点を置く私たちにとってもこれらの問題は、決して他人ごとではありません。では、その課題と歴史的背景に私たちはどうやって向き合っていけばよいのでしょうか。

一つの方法は文学を読むことにあります。歴史の大きな流れは、一人ひとりの小さな個人が作り出すものです。その個人の物語は、文学や芸術的な表現を使って表すことが可能です。この授業では、文学作品を通して歴史の中の小さな声を拾い上げ、その奥に潜む大きな世界に手を伸ばす作業を行います。本年度はイギリスという国と文化を植民地から見る小説を読んでいます。

授業はごく最近の短編小説を読書会形式で読み解きながら、その裏に潜む社会問題や歴史の流れを探っていく方式を取ります。授業では文字表現のみならず、音楽やそれらの短編小説をもとにした、あるいは関連する映画なども取り上げていきます。なるべくたくさんの小説に触れる予定なので、英語で作品を読むことに抵抗のない方々に履修していただきたいと思います。

事前の準備：1～2年生の間にイギリス地域文化論だけでなく、ほかの地域の文化論などで、広く社会的な課題について学んでくださることを望みます。また、自分が慣れ親しんでいる文学や音楽、映画などにどのような社会的な視点が反映されているのかも見つけなおしてみてください。

「関連する科目」として履修をすすめる科目：副専攻としての認定を望む場合は、「地域文化論」や「人文科学特論」、その他、論文に向けてご自分の興味のあるイギリス文化・政治関連の科目を積極的にとっていただきたいと思います。

その他：授業は対面で行います。なお、授業に関して質問や問い合わせがある場合は [chacky★keio.jp](mailto:chacky@keio.jp) (★を@に変換) まで連絡してください。なお、詳しいことは以下のイギリス文化専攻の合同説明会でもご紹介しますので、ぜひともご参加ください。

12/18 (水) 12:30-12:55 J21 教室

当日は Zoom でも参加できます。以下のリンクからお入りください。

<https://keio-univ.zoom.us/j/82094074832?pwd=bLk1XyuXDt1XzKp2IqTOmamaRqdT5z.1>

Meeting ID: 820 9407 4832

Passcode: 819555

**法学部副専攻認定制度**  
**人文科学研究会**  
**(3・4年生)**

**担当者：**林 りん しゅうこう 秀光

**テーマ：**人文・社会科学と自然科学の架け橋——環境史を学ぶ

**授業内容：**

歴史研究は人間同士にまつわるさまざまな関係を描いてきたが、テクノロジーの進歩により、今や人間とAIの関係も取り沙汰され、それを解釈し理解する新しい学問の登場が待たれている。そうした大きな時代の流れの中でいま一度、人類に生存と文明を育む環境を提供してくれた自然との関係を捉えてみる必要性がますます重要になってきたといえよう。

当人文科学研究会では、文明の誕生と環境、国際社会におけるパワー・バランスの不均衡と環境、災害や疫病、資源開発、環境の変化と保護に関する自然と人間社会の葛藤について、環境史の分野横断的なアプローチを通して学び、現代に生きる者としての理解と見識を得ることが目標である。また、中国をはじめ東アジアにおける環境史研究の動向を把握し、問題発見と同時に従来の歴史研究に「人間と自然との相互関係」を捉える環境史のアプローチを取り組み、新たな分野の開拓や「知」の創造を期待したい。この研究会は受講者がそれぞれの専門である法律学や政治学の知識を生かして貢献し、互いに刺激し合うことのできる場となることを願っている。

**事前の準備：**

- ① 入ゼミの選考は行わないが、問題関心や入ゼミの希望理由について一言お伝えいただくとありがたい。法学部以外の塾生も履修可なので、同様にご連絡ください。
- ② 授業のスケジュールや輪読する書籍を法学部(三田キャンパス)のシラバスでご確認ください。  
2024年秋学期は、『海と帝国——明清時代』(上田信著、講談社)の輪読と4年生の卒論発表を行っているので、ゼミ参観を歓迎する(金曜日3限、三田キャンパス 525B)。

**「関連する科目」として履修をすすめる科目：**

特に定めない。環境史研究は分野横断的な学問なので、ご興味のある授業を履修して卒論作成につなげることができればよいと思う。

**その他：**

通年の履修が望ましいが、なにか特別な事由があればご相談ください。

ご不明な点があれば、担当教員の下記 email までご連絡ください。

[xlin@keio.jp](mailto:xlin@keio.jp)

**法学部副専攻認定制度**  
**自然科学研究会**  
**(3・4年生)**

**担当者：**おの ひろたけ  
小野 裕剛

**テーマ：**生命科学にかかわる諸問題

**授業内容：**

皆さんの主専攻は法律学や政治学ですが、ヒトの生命・特に遺伝子に関連した分野を扱うことは少なくないでしょう。このクラスではその背景を掘り下げたいと希望する学生を対象とし、資料(英文原著論文など)の読解を通じて、背景となる生物学的知識を体系化する能力を養います。

例年、この科目による副専攻認定には原則として2年間の履修を求めています(独自基準)。1年目に基礎知識を養い、2年目には複数の原著論文を要約しつつ、自身の考えを組み入れて、総説としてまとめる作業を行います。単年度の履修を認めることもあります。よほどの場合を除き副専攻認定は難しいと考えてください(難しい主たる原因は学生の皆さんの生物学関連習熟度未達のため)。

授業時間内はその週に行った学習・研究の成果を報告し、議論と質疑応答をおこなう時間となります。資料・文献を読み、情報をまとめる作業は自宅などで行っていただきますので、十分な時間がとれるようにしてください。

最近取り上げた内容(例)は次のようなものです。

1. ゲノム編集の仕組みと展望
2. 抗生物質の濫用と人体への影響

**事前の準備：**

高校の「生物基礎」の内容は完全に理解している前提でスタートします。法学部の学生さんでは履修した人は少ないかもしれませんが、高校「生物」の内容にも学習参考書などを利用して目を通しておいってください。大学(理系)教養レベルの教科書を入門に使用しますので、レベルを確認しておいてください(『キャンベル生物学』や『アメリカ版大学生物学の教科書』など、図書館にあるものから探してください)。初年度は基礎固めをしたうえで、山中 iPS 細胞論文を読みながら、研究技法や論理構成を学ぶ予定にしています。受講者の希望によってはこれ以外の分子生物学・細胞生物学の論文やテキストを採用することもあります。二年目はヒトを巡る遺伝学・分子生物学関連の分野からテーマを選んでいただきます。

西川伸一(監修)『山中 iPS 細胞・ノーベル賞受賞論文を読もう』一灯社(2012)

渡辺公綱(他)『英語論文セミナー 21 世紀の分子生物学』講談社(2013)

**「関連する科目」として履修をすすめる科目：**

生物学(実験を含む)I・II および 自然科学研究会 I・II、その他自然科学系の実験科目・特論・教養研究センター設置科目など。担当者は問いませんがなるべく遺伝子関連の内容が多いものを勧めます。

**その他：**

基本的に日吉第二校舎 231 教室で対面授業を行います。副専攻認定レベルの指導を行うため、希望者多数の場合は準備状況(生物学の基礎知識)や受講動機を聞いて選抜することがあります。また、事前相談無く履修登録した場合は単位を認めません。

事前相談(個別説明会)はなるべく対面で、希望者(個人またはグループ)とメールで日時を打ち合わせた後に行います。まずは ono@keio.jp までメールで問い合わせてください(できるだけ義塾から配布されたアドレスを使用のこと。フリーメールからの問い合わせには返信しないことがあります)。

**法学部副専攻認定制度**  
**自然科学研究会**  
**(3・4年生)**

こばやし ひろみち  
**担当者：小林 宏 充**

**テーマ：身の回りの科学研究(物理学)**

**授業内容：**

身の回りの科学現象に関する研究や勉強を実施する少人数のゼミ形式の授業です。普段なぜだろうと思ったことや気になった科学現象を、解き明かしましょう。

問いの設定から解決に至る自然科学の実証プロセス（調査方法・数理科学的な論理的思考法・論文執筆や発表の技法）を学びます。担当者の専門は空気や水などの流れの物理学です。野球などのボールの変化、洗面台の水抜きといった身近な流れ現象から、雲の形成、大気、海洋、温暖化などの気象現象、宇宙まで関連しますが、身の回りの科学現象であれば、テーマは問いません。

春学期は、解き明かしたい科学現象を設定し、それに関連する教科書や文献を講読することで、基礎的な知識を習得・整理し、予備的な研究を実施して報告・討論を行います。秋学期はその科学現象に関して本格的な研究を実施し、その結果を報告・討論して、各自もしくはグループで最終的にレポート（論文）を提出します。文系の感性でブレークスルーを起こしましょう。

**事前の準備：**

「自然科学」副専攻として認定されることを希望する場合には、この自然科学研究会 III・IV（同一担当者の2クラス）4単位に加えて、日吉設置の実験科目（半期2クラス）6単位と、その他の自然科学科目を合計16単位以上履修する必要があります。また、本研究会で研究活動を行い、研究レポート（論文）を執筆する必要があります。

副専攻の認定を求めない場合でも、自然科学研究会 III・IV は3、4年生対象の科目であり、履修に際して自然科学科目8単位を取得していることを原則とします。

初回の授業までに研究したいテーマ（現象）について、いくつか候補を考えておいてください。

**「関連する科目」として履修をすすめる科目：**

小林が担当する物理学 I・II（実験を含む）を履修していることが望ましいですが、必須ではありません。物理学や地学、数学系、情報系の科目の履修を広く推奨します。

**その他：**

- ・実験・観測を行う予定があることや資料・設備の関係から、日吉キャンパスで開講します。
- ・個別説明会は来往舎の面談スペースで行います。希望者（個人またはグループ）はメールで [hkobayas@keio.jp](mailto:hkobayas@keio.jp) に日時を相談ください。
- ・個別説明会の参加は履修の必須要件ではありません。
- ・副専攻の認定を求めない方の履修も可能です。